

討論

■発言者

村上 咲(司会)……京都大学大学院

西尾 寛治 ……防衛大学校

河野 元子 ……京都大学大学院

森下 明子 ……日本学術振興会特別研究員・京都大学

山本 博之 ……京都大学地域研究統合情報センター

伊賀 司 ……神戸大学大学院

川端 隆史 ……外務省

鈴木 絢女 ……日本学術振興会特別研究員・
政策研究大学院大学

金子 芳樹 ……獨協大学

西 芳実 ……東京大学

鳥居 高 ……明治大学

舩谷 鋭 ……立教大学

鷲田 任邦 ……東京大学大学院

中村 正志 ……アジア経済研究所

選挙を通じた開発資金の調達

西尾 山本さんのお話を聞いて、サバの人々の鮮やかな選挙対策のようなものを感じました。「選挙前にBNが不利だという情報が流れた」という森下さんのお話も、サバの人々が、選挙を通じた開発資金の調達というように見越した上で、戦略的に情報を流したというように解釈できるかもしれません。それに対してトレンガヌは、BN政府の開発政策に操られて揺れ動いているという印象を受けました。3人の方々のご報告をそのように理解してよろしいでしょうか。

村上 それは、住民の側から見ると、ある意味でサバやサラワクの側がずる賢いということですか。

西尾 いや、ずる賢いというよりも、いわゆる「weapons of the weak」(弱者の武器)というように私は受け止めましたが。

河野 今日お話ししたところからすると、トレンガヌのイメージとしては政府の開発政策に揺れ動いていると言えるかと思います。

森下 もともと有権者が、開発資金が入ってくるようにと考えて選挙前に野党に投票すると言っておこうと考えていたかどうかについては何とも言えません。サラワクの場合では、BNが勝った方が村レベルまでちゃんと開発資金が入ったりしていて、その金額は選挙のときに100リンギや500リンギを現金でもらうよりも大きいだろうとは思いますが。

山本 選挙対策といったときに、一般の有権者を見ているのか、それとも地方政治家を見ているのかは分けて考えた方がいいと思いますが、それはにおいて大まかにお答えするならば、サバの人々が例えば開発資金をどう調達するかというようなことを考えて選挙に臨んでいるという言い方をしてもいいと思います。開発資金だけの話ではなくて、ビジネスチャンスとまで言ったら言い過ぎかもしれませんが、選挙を生活水準向上のためのチャンスの1つと見ていることは確かで、それをどう有効に利用するかをサバの人々はちゃんと考えています。ただし、以前は自分の選挙区の議員が連邦レベルで野党でもかまわないという雰囲気がありましたが、1990年代以降になると連邦政府とつながる道を確保しないとチャンスが手に入らないという考え方が広く受け入れられているように思います。連邦政府と言っても、今の連邦政府を担っているBNでなくてもよくて、別の政党が連邦政府を担ったらその政党ということになりますが。

石油ロイヤリティと開発

川端 河野さんのご報告で、海底油田をリソースとする分配というお話がありました。石油ロイヤリティが具体的にどのように州に分配されているのか、そしてその分配に対する連邦政府の影響がどのようになっているか、何かおわかりでしたら教えてください。

さい。

河野 トレンガヌの開発政策は、まず1974年に始まって、顕著に出るのが1982年の選挙だと言ってよいと思います。当時の新聞記事からもわかりますし、これについて研究はほとんどありませんが行政資料がいくつかあります。それらを見る限りでは、石油ロイヤリティが入ってきたためにインフラの整備が進み、さらに博物館ができたたりゴルフ場ができたりました。これらはみんなが使えるものとして作られたけれど、トレンガヌの一般の人々にとってゴルフ場なんて必要ないわけです。それなのに、目を見張るような大きな施設がぼんぼんと作られていきました。トレンガヌは開発がとても遅れた地域でインフラはぜんぜん整っていませんでしたので、道路をどんどん作っていきました。これが村のレベルで起こりました。その後で開発のための資金が土地にまわされるようになりました。その時点では住民レベルまで開発は届いていませんでした。例えばJKKKを使ったkerja kampung（村のプロジェクト）はまだ行われていなくて、その次の段階でそういうことが起こるようになります。

山本 PBSが州で与党、連邦で野党だった時期、連邦政府から与党所属の国会議員に1人あたり年間数百万リンギの開発資金がついていました。正確な金額はきちんと調べていないのですが、年間200万から300万リンギ程度だったと聞いています。ところがPBSの国会議員にこの開発資金はつきませんでした。PBS議員が開発プロジェクトを実施するに当たっては州の開発予算をまわして、そのもとに石油ロイヤリティなどからの収入があったのではないかと思います。その金額は1人あたり年間700万リンギと言っていたときもあります。これでインフラを整備するといえは整備するのですが、実際にやっていることは、開発資金が議員に渡されて、それがPKRという議員の地元秘書のような役職に渡されて、さらに下部のCDOやJKKKを通じて村レベルまで開発プロジェクトが入っていくという仕組みです。

伊賀 州の石油ロイヤリティが5%という話はよく聞きます。5%の石油ロイヤリティというのは、州の財政にそのまま入るんですか、それともいったん連邦政府に入ってプロジェクトなどの形で州に還元

されるんですか。

河野 トレンガヌの場合は、1975年に石油法ができた後、契約はペトロナスと州首相のあいだで結ばれています。でもお金は州政府に入っていない。1999年の総選挙でトレンガヌでPASが勝ったときも、連邦政府はトレンガヌへの石油ロイヤリティの支払いを止めています。

伊賀 選挙後の動きをちょっと見てみたんですが、いったん連邦政府に上がって、連邦政府から州に5%を分配しているわけですね。

河野 今はそういうふうに変ったかもしれませんが、私は2004年までしか見ていないのでそれ以降の様子はわかりません。

伊賀 2004年の段階だとどうなっていたんですか。

河野 2004年の段階では石油ロイヤリティは州に一切入っていませんでした。1999年から2004年までトレンガヌはPAS政権時代だったので。

サバが野党支持にまわる可能性

鈴木 山本さんの話を聞いて、私はサバの選挙をこう理解しました。候補者が立候補するのは基本的にはお金が欲しいからで、お金は連邦政府からくる、だから連邦政府に直結するしかないし、直結するとしたらBNに入るしかない。だからサバにおける選挙というのはBNのメンバーシップをめぐる闘いだ、と。そうすると、野党のラベルを使って選挙を戦うこともあるけれど、その究極的な目標はくると寝返ってBNに入ることだという理解になります。そう考えると、BN以外の政党がサバで野党として存在し続ける、つまり、当選した野党議員が当選後も野党議員であり続けることはないと考えていいですか。すべての候補者がBNの議員になりたいから立候補していると見ていいですか。

山本 とっても単純かつ乱暴に言うと、1990年代以降の状況はそういう理解でよいと思います。

鈴木 そうすると、今回サバではPKRのラベルを借りて選挙に出た人がいたというお話がありましたが、これもゆくゆくはBNに入ろうと思っているけれど、たまたまラベルを貸してくれたのが半島部のPKRだったというお話だったのでしょうか。それとも、半島部で何か民族を超えた動きがあるらしいことを察

知してPKRから立候補したということでしょうか。今回サバでPKRから候補者がたくさん出たことが、サバの文脈でこれまでと違う意味づけになる、つまり、鞍替えをするための腰掛としてのPKRだったわけではないという理解はできないでしょうか。

山本 前者だと思います。今回の選挙ではBNの候補者の調整がうまくいったようで、ほとんどの選挙区でBNの候補が勝ったためにどちらか判断しにくくなっています。もしPKRの候補者が何人か当選していたら選挙後にどうなったか興味深いところです。当選後にさっとBNに買われて移籍した可能性もかなり高かったでしょうし、もしそうだとしたら、半島部からPKRが来たからそれに乗っかって選挙に出て、当選したらBNに移ったという理解が成り立つことになります。実際には、今回サバでPKRから立候補している人の多くは地元での政治的影響力がそれほど大きくなくて、どちらかという頭数を揃えたという印象があるので、半島部の動きを察知してサバの人々がPKRに鞍替えしたということではないように思います。半島部でBNが大敗したという結果を見て、これまでと様子が違うと思ってPKRに踏みとどまって違う選択肢に向かう可能性も今回の選挙では無いわけではないだろうと思いますが、いずれにしても選挙の前に半島部の風向きの変化を感じ取ってPKRを支持したということではないだろうと思います。

金子 そうなると、例えば今アンワールがサバに行って野党連合に参加するようにと多数派工作をしたとしても、その工作はサバの人たちには基本的には効かないということですね。

山本 いえ、半島部で与野党の勢力が逆転する可能性があれば、サバの人たちが野党連合を支持する可能性は十分あると思います。

金子 でもBNが政権をとっている限りは移らないということですね。

山本 いや、サバの政治家がいつせいに移るんじゃないで、サバではこういう状況になるとまず1人か2人、ぼーんと政党から政党に跳んでみる人が出てきます。最初に跳ぶ人は失敗するリスクも大きいけれど、それだけ大きいものがもらえれば跳んでみます。1人か2人が跳んで様子を見て、やっぱりうまくいかないと思ったらほかの人たちは跳ばないというこ

とです。

鈴木 跳ぶというのはどちら側に跳ぶんですか。

山本 どちらの話でもあります。これまでは野党から与党に跳ぶ話でしたが、今しているのは与党から野党に跳ぶ話です。

金子 でも今はPKRは連邦で野党なので、PKRに鞍替えしたとたんに連邦政府からの開発資金のルートが断たれてしまうことになりますね。次の選挙の直前なら話は別だけれど、選挙が終わったばかりの今の時点で野党連合側に鞍替えするモチベーションはないんじゃないですか。

山本 次の選挙までの5年間で与党にとどまったときに連邦政府からもらえる開発資金に見合うだけの額を一度にもらえば問題ないですね。それが1人2人から3人4人と増えていけば、あとは次々と跳んで全体で逆転するということも考えられないわけではありません。

金子 なるほど。そういう可能性があるということですね。ということは、次回の総選挙でもしかしたら野党連合が政権を取れそうだという状況になったら、それを見越してサバでは選挙前にBNから野党連合側に鞍替えする動きが出てくると考えていいですか。

山本 その可能性も十分に考えられます。ほかにも可能性として頭で考えつくことはすべて現実になる可能性があると思います。

野党連合はなぜ成立したか

西 先ほどのセッションで、半島部では今回なぜ野党が連合を組んだのかという質問が山本さんから出されていました。今回は野党がPakatan Rakyatを作りましたが、そうではなく個別にBNに加わるという戦略もありえたはずなのに、BNの外側で野党が連合を作ったのはどうしてなのかと考えていました。先ほどのやり取りを聞いていて、野党が連合を作ることサバやサラワクなど半島部以外の議席を野党陣営に持ってくるのが期待できて、次の総選挙まで5年待たなくても議会での勢力を変えることができるかもしれないという考えがあると考えられるのかなと思いました。そこで改めて伺いたいんですが、どうして今回は半島部で野党連合ができたんでしょうか。今言ったように、野党連合を作っておけばサバ

やサラワクの議員を受け入れる受け皿になれるからという合理的な判断からなのか、BN粉碎を掲げて選挙戦を戦ってしまった以上は単独で抜け駆けするなんてありえないというのが半島部の政治の論理なのか、マレーシアの政治の論理を教えてください。

山本 先ほどのセッションで私が聞いたかったのもそのことです。半島部で野党が3つ連合すると大きく見えるから、サバやサラワクの議員をいつでも受け入れ可能というアピールになるというのと同時に、3つの野党の間で抜け駆けしてBNに入らないように縛り合ったということもあるのかもしれないと思ったので質問してみました。

西 もともと野党だったけれどBNに取り込まれたという政党は過去にも実際に存在したわけですね。Gerakanはそうだったという話でした。だから野党がBNに入ること自体がマレーシアでタブーであるわけではないんですね。

山本 その通りです。今はUMNOの宿敵のように言われているPASだって、以前はBNの一員だったことがあるわけですから。

西 それはどうしてなのでしょう。

中村 今の野党が連合していることについてですか。

西 選挙の時点では野党として戦ったけれど、選挙の後で与党に取り込まれる政党はこれまでもありましたね。

中村 ありました。それを抑止するために連合して関係を強化したかというご質問ですか。

西 BNの中のMCAの議席が減ったので、華人の代表は自分たちが引き受けますといって野党がBNに加わろうとする動きが出てもおかしくないはずなのに、そうならないで野党連合が作られたのはどうしてなのかということですか。

中村 具体的に言えば、DAPが選挙後にBNに入らなかったのはなぜかということですか。

西 そうです。サバならそういう話もありうるということでしたけれど、どうして半島部ではそういう話が出てこないのか。半島部の政治の常識で考えてDAPはBNに入らないということでしょうか。

中村 いや、例えばPASがこのあとBNに入ったとしても不思議ではないでしょうね。野党3つが選挙で組んでいたのは候補者を調整するためです。今回の

選挙結果は当事者もほとんど予想できていなかったわけで、野党ははじめてから政権をとる目的で組んでいたわけではないと思います。今回の選挙はある意味では1999年より野党間の協力関係が及び腰だったと私は見えています。野党間で立候補者を調整することになって、たぶん調整したことを正当化するために緩やかな連合を作ったんでしょう。それが選挙で勝ってしまったので、関係を強化するという話が出てきたということです。ただし、この後でUMNOがどう出るかわからないし、PASもどうするかわかりません。今回の選挙から次の選挙までは先の長い話ですけど、その間にNECC3（第3回国家経済諮問会議）を開いて今後10年間の長期計画をつくることになると思います。今までだったら、新経済政策をどうするかという問題はそこで話し合うことになっていました。第9次5ヵ年計画の中に新経済政策を2020年まで続けると盛り込んでしまったけれど、この状況だったら誰かが蒸し返すでしょう。こういったことが次の選挙までの間にあるわけで、政策がらみのエスニックな問題が出てくるのは確実です。そのときにマレーシアがどこに向かうのかに私は興味があります。どうなるかは全然わからないけれど、可能性を言うならPASとUMNOが組む可能性だってありえなくはないと思います。

鈴木 サバを見てきた山本さんから見ると、お金がほしくて、そのためBNに入れるかどうかをめぐって戦うのが選挙なのに、半島部では野党というのがきちんとして、BNに入らないと意志を固めあっているというのはやっぱり異様な感じがしますか。

山本 「お金がほしい」というのは「よりよい生活を求めている」とした方が適切でしょうからそう言い換えて考えるとして、今のご質問の趣旨が野党であり続けること自体に意義を見出すことをどう捉えるかという話であれば、半島部はサバほどは政治的に成熟していないという言い方ができるかもしれませんね。

票買い

中村 昨日今日と、このフォーラムは個人的に感慨深く思っています。2004年の選挙の後、とある学会でマレーシアの選挙について話をしたんですが、コ

メンテーターに「マレーシアは開発独裁だ」と言われて、私の選挙の話は一切議論にならなかったことがありました。それに比べると、この2日間にわたって、みんな選挙結果がなぜこうなったのかと語り合っている時点で4年前とえらい違いだと思いました。でも、やっぱり金かという話が出てきて、それをどう考えればいいのか考えています。私のように、データを重視して、事実確認できることから語りましょう、事実確認できないことは語りません、というスタンスだと、票買いというのは犯罪行為であって、自分でそれを立証できない限り、そのことについては書けません。もし票買いがあったという話をするならば、誰かそう書いているものを引用することしかできません。私は、クアラルンプール周辺で、選挙で直接お金が渡されているのを見たことはありません。もちろん、別の形でお金を渡すことはやっています。選挙区の成績優秀者に対する表彰という形でやったり、ご飯を配ったりしてはいるけれど、現ナマを手渡しているのは見たことはありません。さすがに現ナマを手渡していれば、写真に撮っておけば証拠があるので書けるでしょうけれど、私は見たことがないんです。でも、何人かのお話を伺っていると、選挙でお金を配っていることはあるようですね。この手の話はいつもありますが、私が思うのは、それは本当に票につながるのかということです。もらってポッケに入れて帰っちゃえばいいじゃないかと思います。その意味では、森下さんのご報告で紹介された賭けというのはよく考えるなと思ったんですが、実感としてどうですか。お金をもらったら投票しそうな雰囲気なんですか。

塩崎 PASがうまく節まわしをつけて盛んに流しているのは、「金はもらおう、砂糖はもらおう、米はもらおう、でも票はPASに入れよう」というフレーズです。演説でも実際にそう言っています。選挙運動の最終日になると、夜、UMNOがお金を配りに来ます。UMNOが100リングとか200リングとか持ってくれば、お金はもらっておこう、でも票はPASに入れよう、とみんな言いますね。クランタンの人は、選挙はそういうものだと思っています。

中村 じゃあ、クランタンの人にとって選挙はけっこう経済的に潤う季節というぐらいの認識ですか。

塩崎 UMNOが悪びれてないというか、礼儀みたいなものだと思っているようなところがあります。集会に来てくれたんだからお金を渡さなきゃいけないと、何も悪びれずにお金を渡していました。UMNOの陣営に行くとよく見かけます。彼らには一般的な礼儀のようなものですね。

山本 お金はいろいろな渡し方があって、渡しているか渡していないかと言われれば何らかの形で渡しているということはあるんだろうとは思いますが、でもお金を渡さない方向に向かおうという動きもあります。今回サバでは、これまでと違って、選挙運動への役所の動員ではお金を渡さないという共通の了解のようなものができていました。役所の上司が政治家と近かったりするとBNの選挙運動に動員されることがあって、以前ならそこで役所のお金でお米を配ったり水を配ったりしていたけれど、今回の選挙では役所が動員された場合には米や水を配るのはやめようということになりました。表向きはBN支持でも実際には野党支持の役人もいて、BNの選挙運動に役所の金を使うのはまずいんじゃないのかという声が出ているためです。役所ではなくて政党や政治家がスポンサーとなって選挙運動するときには米とか水とかを配ったりしていますが、役所が選挙運動するときに役所のお金を使うのは腐敗だから止めておこうといった縛りをお互いにかけているようです。だから、選挙でお金が動いている部分もあるんでしょうけれど、なんでもかんでも選挙をお金の動きで説明しようとしていたらあまりおもしろくないかなという気がします。

伊賀 おもしろくないというのは山本さんがおもしろくないと思うということですか、それともサバの人たちがおもしろくないと思っているということですか。

山本 私がおもしろく思わないということですが、もう少し広く言えば、研究としておもしろくないんじゃないかということになります。研究対象を見るときに、研究対象が持っているいろいろな側面をいろいろな角度から見て語ることができます。どんなにがんばってもすべての面を見ることはできないのでどこか一部しか語れないんですが、だからこそどこをどう語るかが重要になります。研究発表という

のは、例えば日本語で発表するんだったら日本語がわかる人たちに向けているわけですが、研究対象を通じて自分が聞き手にどう働きかけるかということです。だから、何を語るためにどの面を語っているのかを意識しなければならないということです。ただこういう事実がありましたと紹介するだけだと不思議なもの探しの「世界びっくり大集合」にしかありません。だから、自分はどのような角度から見るのかを意識しながらやっています。一方で、お金のことについては全然話をしないでにおいて、自分はこの民族だからその民族の候補に絶対投票しますっていう話では全然おもしろくないので、だから今回の報告のようにいろいろ工夫して説明しています。それなのに、選挙は結局お金だという話になっていくとおもしろくないと思うという話です。

森下 私は票買いと一言で表現してしまったんですけども、確かに、票買いと言えるものと、議員が選挙運動で村に行ったときに、今ちょっと子どもの教育費が足りなくてとか、娘の結婚資金が足りなくてちょっと助けてくれないかという形で頼まれてお金が渡されることがあります。そういう形のお金の受け渡しもあるということをおきかかったんです。それから、この話でサラワクの例を出して意味があるのかちょっとわかりませんが、与党からお金をもらってにおいて野党に投票している人が増えているのではないかと与党側も懸念していました。そういうことが気になる地域では、まず半分のお金を渡して、投票が終わってBNが勝てば残りを払うという形があります。それから、これはサラワクにいない人が言っていた発言ですけど、お金をもらったらちゃんとBNに投票するなんてマレーシア人はとても真面目な人たちだねと言われたことがあります。

オルタナティブ・メディア

舩谷 午前中のセッションでメディアの話があつて、半島部では昨年11月に選挙の公正を求めるデモがあったことが言われていました。そこではオルタナティブ・メディアの台頭が見られるという話がありました。半島部から見ていると、サバやサラワクでは主流メディアがオルタナティブ・メディアと同じような役割を果たしているところがあります。華語紙

にオリエンタルデイリー（東方日報）というのがあるって、お金は東マレーシアから出ているんですが、そのメディアが例えば半島部のオルタナティブ・メディアである*Malaysiakini*の記事を華語に訳してコラムに載せたりしています。まだ*Malaysiakini*の華語版がないときには、オルタナティブ・メディアとつながるようなことをしていたことがあります。このように、サバやサラワクは自分たちは主流メディアとは違うというスタンスでやってきたメディアを生み出した場所だと言えるんですが、選挙の公正とかメディアの多様化という方向の動きはないんでしょうか。半島部との比較で確認したいんですけど。例えば、オルタナティブ・メディアとか、その他のメディアの影響はどのように見ることができますか。

山本 インターネットに限って言えば、サバではあまり普及していません。どれだけの人が見ているのかはデータがないのでよくわかりません。役所に勤めている人は勤務中にけっこう見ていたりするけれど、それ以外だとほとんど見る機会がないという印象があります。

舩谷 インフラの違いということですか。

山本 そうです。サバの主な情報源は新聞やテレビ・ラジオになります。

舩谷 確かにサバでは携帯電話はだめで、セルコムくらいしか通らないですね。そうするとSMSも制限されますね。

村上 農村地域のトレンガヌなんかはどうでしょうか。

河野 私が最後に社会調査したのは2005年9月ですからデータはずいぶん前のものになりますが、非常に詳しくライフヒストリーを聞き取ったのが約80件ありました。当然家計状況なんかを聞いているんですが、その調査ではテレビもラジオも無いところはありませんでした。私が入ったのは漁村地帯だったんですが、テレビやラジオはどの家にもありました。パソコンは2割くらいの家庭にありました。トレンガヌの漁村地帯ではそんな感じでした。これはだいたい前の情報ですから、携帯電話はもっと普及していると思います。

都市部で野党が躍進

鷲田 今日のお三方のお話に、票を金で買うという

話が出てきました。私も票を金で買うことについて研究しているのですが、票を金で買うことを考える上で重要なことは、後進州で野党が勝ってきた今までの選挙と違って、今回の選挙ではスランゴールとかペナンとか経済が発展した都市部の州で野党が勝ったということです。票買収の議論では、経済が発展して所得も上がるとなかなか票買収に応じなくなってくる、インフラも飽和してくるといわれています。また、今まで野党が勝った後進的な農村部の州に対しては、BNは連邦開発局とか、石油ロイヤリティとか、あからさまにがんがん絞ってBNを支持するよう脅しをかけることで対処して、これまでクランタン以外の野党州では奏効してきたわけですが、今回のような都市部ではそうした脅しが効きにくいと考えられます。これまで野党州に対してBNが何をしてきたのかを承知の上で、今回、票買収も懲罰的な脅しも効きにくい都市部の有権者たちが野党に投票して、予想外だったにしても野党が大勝したこと、また、それによって政権交代が起こり得るという認識が生まれたことのインパクトは、今後のBN体制を考える上でどう考えればいいのか、どなたでもかまいませんが何かご意見を伺いたいと思います。

村上 (司会) どちらかという後半部の話ということでしょうか。とても大きな議論の中心になるかと思っていますので、みなさんには考えていただいておいて、答えがまとまったらこの場で出してもらって、そうでなければ総合討論においておきたいと思います。

「サバ人のサバ」とサバというまとまり

川端 自分の発表と先ほどの西さんのコメントを絡めて考えていました。サバとサラワクの話聞いていて、山本さんの概念図を見たり、森下さんのお話を聞いたりして、本当にサバもサラワクも半島部とは違う理屈で動いていると感じました。片手でBNにぶら下がって、空いている方の手でお互いにいろいろやっていて、ぶら下がっている手さえ離れなければいいというイメージを受けました。私が前のセッションで扱った新党は、基本的にUMNOの権力構造に大きな変化が起こるときに発生しています。それが原因で新しい政党ができるというように進んでいきます。私は先ほど新党でそういう議論

をしていて、そうすると、もちろんサバやサラワクのように他の価値観で政治が動いていると別ですけども、半島部では、選挙で野党が躍進したときはUMNOの権力構造の揺らぎと絡んでいるところがあります。それから考えると、サバやサラワクはUMNOの権力構造の影響を受けにくいのかなと思いました。サバはBNだけれどBNではないというお話がありましたが、トレンガヌでは1999年の選挙で政権をひっくり返したし、1990年の選挙でも、ひっくり返りはしなかったけれどそれなりに票は伸ばしています。このことが半島部とサバ、サラワクでの中央政治の影響の違いというか、UMNOの権力構造の変化の影響が出やすいかどうかに関わってくるように思います。今ある新党や今後出てくるかもしれない新党を考えてみると、PKRが出てきたことによる影響はサバやサラワクではあまりないのかなと思いました。

村上 その点は私も思いました。山本さんのご報告は、3つ色をちょっと変えてBNだけれどBNではないという話と、BNが圧勝したとしても「サバ人のサバ」のようなものが残るというお話でした。そういう意味で、BNとしていちおう連合はしているけれど、その連合を断って野党連合に移る可能性もあるという話でした。そのときに「サバ人のサバ」が残るというのは、サバのプレゼンスを高めるという意味で交渉しながら起こるのか、それともこのBNというのは本当に名目上のもので、選挙区ごとにそれぞれの事情によってBNを名乗っているのみのBNなんでしょうか。つまり、サバにおけるBNというのは、そこに一体性があるのかということです。例えばアンワールと交渉するようになったらアンワールは個別に交渉できるのか、それともBNの全25議員をひとつのまとまりとして交渉できるのかということです。

山本 私の報告で「与党陣営、BN対BN」と書いてある箇所を見ていただきたいんですが、サバのBNにたくさんの政党が入っているけれど、実質的にはUMNO、PBS、SAPP、UPKOの4つだけだと書きました。この4つは党としての組織がしっかりしていて、昨日のセッションの言い方でいえば、党としてのサービスがちゃんとできているところです。このほかにサービスに関してはMCAもよくやっているけ

れど、これは半島部から来た政党で不人気なので勢力がないため除きます。これ以外のLDPやPBRsなどはほとんど個人政党です。このように、サバのBNは一体で捉えるのではなく、サバUMNOとかPBSとかSAPPとかいう形で話をした方がわかりやすいだろうと思います。実際、SAPPがBNを抜けて野党連合に加わるのではないかというような政党ごとの動きの噂が流れていたりもします。

BN 体制でマレー人新党が生まれる仕組み

山本 先ほどの川端さんのご指摘に関連して、私は半島部のUMNOの指導者の対立がサバに影響を与えるということはほとんどないと見ています。川端さんが半島部でUMNOが割れて新党が出てくる仕組みについてお話くださったので、これをもう少し別の形で整理してみます。半島部では、もともとマレー人政党のUMNO、華人政党のMCA、インド人政党のMICの3つでマラヤ連盟が作られました。この体制は1969年くらいまで続きましたが、その原則は、私が報告で使った図を思い出していただきたいんですが、一民族一代表、つまり1つのバンサに1つの政党というルールでした。ところがそのうちに、各バンサの代表、つまり華人ではMCA、インド人ではMICがそれぞれ各バンサをきちんと代表できないという批判が強まって、この体制ではうまくいかなかった、それが形になって表われたのが1969年の総選挙でした。そこで、バンサごとの代表がうまく機能していないという問題にどう対応したかという、野党をうまく取り込んで、1つのバンサに2つ以上の政党があってもいいということになって、こうしてBNが作られました。その過程で、もともと既存の民族別政党を批判して特定のバンサに根ざさない政党として出てきた野党は、BNに加わるに当たって3つのバンサのいずれかに自分たちを位置づける必要が出てきて、だから例えばGerakanが華人政党としての顔も持つことになりました。それと同じようにPASもマレー人政党としてBNに加わっていました。華人とインド人は各バンサに2つ以上の政党があっても、お互いに対立してもマレー人が上にいて抑えていけばBNとしてのまとまりは維持されるので大きな問題にはならなかったけれど、マレ

ー人に関してはUMNOとPASの2つの政党があると代表権を争って喧嘩になって解決しようがなくなってしまう。だからマレー人枠にはUMNOだけということになって、PASが出ていったというように理解できます。だからBN体制ではマレー人はUMNOが代表せざるを得なくて、UMNOのなかで権力闘争が起こってUMNOが割れるとBNの枠組では吸収しきれずに野党にならざるを得ない。UMNOの権力闘争の結果として野党が新党として結成されることが繰り返されるのはそういう仕組みになっているからだろうと理解しています。

州首相の影響力

伊賀 川端さんのUMNOの権力構造の揺らぎと関わるかもしれませんが、州首相のリーダーシップはどれだけ有効なんでしょうか。森下さんと河野さんは2人とも州首相の派閥争いに言及していました。州首相の影響力、あるいはそういうものが実際に州の選挙なり政治なりを見るときにどういう位置づけで見たらいいのか、選挙の結果に影響しているのか、そういう点をもう少し詳しく聞かせてください。

河野 影響力はかなり大きいと私は思っています。例えばトレンガヌのグラフを見ると、得票率は1.8ぐらい下がっているけれど伸びたところもあって、そこは州首相の地元です。その前のPAS政権のトップはイデオログとしてのリーダーシップが大きい人物でした。この時代も州首相の影響力は大きかったといえます。その前の二十数年続いた州首相は、この時期は他に有力なイデオログがいなかったかもしれませんが、強いイデオログを持っているPASとの関係で、ウラマーという性格を持ち合わせていたので何とか対応できました。その人物だから選挙で押そうという考え方も出てくるので、影響力はかなり大きいと思います。

伊賀 今回の選挙でイドリス・ジュソーの話が出ていますが、イドリス・ジュソー自体はどうだったんでしょうか。トレンガヌが野党州にひっくり返らなかった理由としてそのことを挙げる人もいます。今回の選挙で野党州になった州をいくつか見ると、クダーやペナンで州の与党内のリーダーシップの問題が出ていところもあります。それと比べて、トレ

ンガヌのイドリス・ジュソーは今回の選挙でどうだったのでしょうか。

河野 イドリス・ジュソーは2004年の選挙ではじめて州首相になりました。取り上げられていた石油ロイヤルティが戻ってきましたから、かなりいろんなことをやったのだと思います。開発事業を再開して、村レベルまでさまざまな事業を進めました。もちろん利権をめぐる汚職の問題もありますし、今回は話しませんでした。スルタンとの関係とも抵触するところが出てきますが、人々の間ではそんなに悪い評判ではなく、頑張ってくれているという声はPAS側の人たちからも出ていました。

森下 UMNOの権力構造の揺らぎがどう影響するかというところで、サラワクに関しては影響はないと思います。UMNOが完全に野党になった場合にはサラワクは確実に動くと思いますが、そうでない限りでしょう。サバの場合は、直接有権者の投票行動に影響する前に1つ2つステップがあると思います。UMNO中枢部のぐちゃぐちゃとした対立構造は、サバの政治エリートの権力闘争に一番影響があると思います。特にそれが表れたのは、サバの州首相がサバのUMNO内の派閥によってリーダーシップが弱くなって、そうすると、サバのUMNOの州支部長を変えたいから野党に投票して、サバにおけるUMNOの得票率を下げようとUMNO支持の有権者が思うかもしれません。州支部長を変えようというだけで、野党候補が勝ってしまうくらいまで票が動くかどうかはわかりませんが、そういう意味では非常に関連していると思います。野党が勝った理由として直接影響があるとは言いきれないと思います。

伊賀 サラワクの州首相は20年以上も1人でずっとやっています。UMNOの話から少し離れますが、サラワクでは彼のリーダーシップに対する反対はどうなのでしょうか。

森下 サラワクの州首相のタイプは、私はマハティールみたいな人物だと勝手に思っています。要するに非常に強いリーダーシップがある人で、しかもそれが揺らがない人です。健康不安があるとは言われていますが、ファミリービジネスで非常にお金を持っていること、そして非常に頭がよくて他民族の政党に全部バランスよくポストを配分して、政治的経

済的利権を配分するのがうまい人で、この人がいるからサラワクは政治的に安定していると言えます。病気になったりしない限り、この支持は固いですね。今は後継者問題が出ていて、誰になるのかまだ完全にはわからない状況です。候補に挙がっているのが全部マレー系なのですが、タイプがここまで長くもったのはムラナウ人だったからという見方もあります。マレー系とダヤックの間の社会的関係はよくないということがあるので、ポスト・タイプになるとサラワク内で政治変動が起きるかもしれないと思います。

山本 半島部のUMNOの権力闘争がサバのUMNOの指導性にどう影響するかという話ですが、私はほとんど影響ないと見えています。サバUMNOで誰を指導者に選ぶかは、UMNOがサバに進出して以降は半島部の指導者にいちおうお伺いはたてるけれど、でもサバの中で決めています。半島部の権力闘争の影響があつてサバのUMNOの指導者の力が強くなったり弱くなったりするということではありません。まったく言い切ることはできないけれど、少なくとも今のところはそういう状況です。半島部の指導者が変わると支持表明もころっと変わったりします。

サラワクは「川で切れる」のか

山本 サラワクを分析するときに民族で分けて民族別に投票行動をみるのはどれだけ有効なのでしょう。サバに関しては、サバの人たちは民族別に見せ方をしたりするけれど、実際のサバ社会は民族間の区切りが明確でないで民族別に分けて民族別の投票行動を見るのは目安にしかないということはお話しましたが、サラワクではどうなのでしょう。

森下 民族で切れるか切れないかというのは、要するに有権者が政府がだめだ、ここからお金がこないと思ったときに、民族のラインで資源アクセスに頼るかどうかという意味でしょうか。

山本 それもそうですし、その前提として、社会内の民族の区切りが明確になっているということがあります。その区切りが何らかの形で制度化されていくとか。サラワクにそれがいいのかという話です。

森下 サバと比較すると多少ははっきりしていると思いますが、半島部と比較するとそれほどはっきり

していない、ちょうどあいだくらいだと思います。

参加者 サラワクでは、ムラナウを除けば、ムスリムはみんな一括りにマレー人とされています。サバだとムスリムにもバジャウとかいろいろいますが。

山本 政党の支持とか投票行動とかにそういう区切りがどれだけ影響を持っているのでしょうか。あるいは、民族とは違う区切り方をした方がサラワクの政治はすっきりわかるということでしょうか。

森下 基本的に民族ラインで乱暴に切ろうと思えば切れるかもしれないと思います。ただ、PBBはムスリムをある程度支持基盤にしているけれど、PBBの副党首はダヤックなんですね。政党の段階で民族が3つ混ざっている状況なので、それを考えると民族では切れないと言えらると思います。ただし、PBBのダヤックは少数派なので、それを除いて考えれば、ある程度民族で切ることもできるんじゃないかと私は思います。

山本 民族で無理やり切ろうとして切れるかどうかという話ではなくて、何で切ればすっぱり切れるのかということを検討したいんです。西尾さんからコメントがあるかもしれませんが、私の古典的なサラワク理解では、サラワクは川ごとに見るんです。大きな川が3本か4本あって、川の流域ごとに上流から下流まで纏まって政治勢力を作って、川ごとに競合しています。それを民族で語ろうとすれば、異なる民族が協力しているとも見えるだろうし、川の流域が違っても同じ民族どうして対立しているとも見えるだろうし、うまく説明しきれなくなるけれど、川で語るとすっきりします。少なくとも独立当初のサラワク政治はこれで理解できます。でも、この見方が今でも通用するのかは、ダムを作るためにラジャン川流域の人たちが他の地域に移住したり、あるいは伐採道路が作られたせいで川筋が違う沿岸部の町と内陸部が結びついたりしているので、最近では川で見れば理解できるという状況が変わってしまっているかもしれない、それについて何か伺えればと思ったんです。

森下 川ごとに見るという区切りは、非ムスリム・ブミプトラがダヤックとして纏まっているのかどうかという議論の時によく出てくるように思います。華人政党は1つしかなくて、華人でBNを支持する人

はSUPPに入れるので、華人やマレー人は川では切れないように思います。

サラワクの華語新聞

山本 サラワクを川で区切る見方については、発行地別の新聞の競合と言えば伊賀さんが補足してくれるでしょうか。つまり、マレーシアの中をいくつかに分けて捉えるとなると5つに分けるという話になっていて、サラワクは1つのまとまりだということですが、それではサラワク内のことを理解するためにサラワクをさらに分けるとしたら、民族ごとに切ってみると話がわかりやすいのか、それ以外の切り方がいいのかという話になっていて、1つ可能性として川の流域ごとに切るという考え方があります。川ごとに切るとサラワクの内部がわかりやすくなる例として、サラワク内の発行地ごとの華語新聞の競合という方面からお話しただけませんか。

伊賀 サラワクの新聞は誰が持っているのかという話なら知っていますが……。

山本 川ごとという言い方でわかりにくければ町でもいいです。大きな川の河口にある町どうしの、シブとクチンの競合という形でも。

舩谷 華語紙の話しかわからないんですけど、ボルネオは、華語紙について言うとサバとサラワクは明らかに流れが違ってきます。サラワクで言うと聯合日報が南洋商報の系列で、シブの詩華日報は半島部では東方日報を発行したりしています。ほかに国際時報というのが独自であって、そして星洲日報ですね、それらがサラワクの華語紙のかたまりです。サバは別で、華僑日報があって、シブの詩華日報はサバにもあります。このほかに1981年以降は晨报と南洋商報系列の亜洲時報というのがありますけれど、晨报はどういう系統かわかりません。ブルネイの華語紙は全部サラワクの系統です。サバではなくてサラワクの影響を受けています。

山本 サラワクがいくつかに分けられるかという話はどうでしょう。

舩谷 サラワクには半島部から南洋も星洲も入ってきていて独自系の詩華もあるのに対して、サバは独自系の華僑、詩華と南洋系の亜洲があるので状況が違っていると思います。

伊賀 サラワクの華語紙では、詩華はボルネオ・ポストとかUtusan Borneoと同じグループのKTSグループです。これは木材で儲けた劉一族が持っています。星洲日報はティオン・ヒューキンという人がやっていて、彼もともとサラワクの林業で富を蓄積した人です。東方日報と星洲日報の系統で言えば、両方ともサラワクから出て半島部で活躍しているという話になります。

村上 話がやや細かくなっていますが、今のお二人のお話は、華語紙だけの話ではなくて、その所有者と支持政党がマッチングするというようなお話になりますか。

伊賀 もっと複雑で、KTSグループは半島部で東方日報を発行しているんですが、東方日報はどちらかと言うと中立から野党よりです。でもサラワクに戻ってくると、詩華なりサラワクの新聞を持っている劉一族はBNと非常につながりが深いんです。半島部では野党寄りですが、サラワクに戻ってくるとBNに近い。サラワクと半島部では同じグループでも違いが出てくるわけです。劉一族の次男はBNの議員になっています。

舩谷 すごく簡単に言うと、サラワクは半島部の華語紙のパターンの分け方でいけるけれど、サバの華語紙は南洋商報系統が1つある以外は独立的という感覚を持っています。

伊賀 サラワクと半島部は非常につながりが深いです。**森下** 先ほど山本さんから川の支流と政党の関連と言われて、さっきからメディアの話をいろいろ聞きながら考えていたんですけど、華人で言うと、SUPPという枠の中に、川と言い切れるかどうか分からないですけど、サラワクの3つの大きな町ごとに、ミリとクチンとシブの3つで派閥が分かれているということがあります。各政党の派閥のレベルでいくと、もしかしたら川あるいは町という中心地がいくつかあって、それによって分かれているということがあるんじゃないかと思います。

経済面からの選挙分析

鳥居 3人の報告を聞いていくつか考えたことがあります。1つはトレンガヌというのは従来型の、開発資金をばら撒いてBNが支持を固めていくという

話をさせていただきました。JKKKの役割っていう非常にじっくりいく話ですね。かつてマービン・ロジャースが、マレーシアの選挙分析なんかやる必要ないんだ、要するに農村にお金を配って票を買っているだけだからあんなものは分析する必要がないんだという議論をしていました。

もう1つは、サバとサラワクの話は山本さんが何回も繰り返しているように、半島部とは別の政治空間で、別の政治ロジックで動いているという形でいいのかという問いかけをして、どうもそうらしいということが見えてきた。半島部のデータでは、民族での投票行動が離れ始めてきている、つまり選挙民がかなり自由に動き始めてきているということが少し出てきた。そもそも、サバとサラワクと半島部とに分かれている。そして半島部の中でトレンガヌの話の聞くと、従来型の選挙過程が展開されているところとそうじゃないところが出てきている。そこから考えられるのは、選挙過程で政党と選挙民をつなげていたパイプが、非常に伝統的な経済構造を持っていて、配る方法が沢山ある農業地帯と、それから配る方法がなくなっている都市部なんていうふうに乱暴に分けて議論ができるのかもしれない。そうすると、河野さんの丁寧な地図からプロットされた話になります。これ、気持ち悪いくらいきれいに出了たね。そうすると、今度は半島部の方も同じようなやり方をして、少し丁寧に従来型の、はっきり言えば生活を良くするためのお金を配れるところと配れないところというところで、配れないところは、政党とあるいは候補者と選挙民とのパイプが細くなって、要はパトロン・クライアントが薄くなってきて、自由な行動として出てくる、なんていうふうにまとめすぎるとちょっときれいすぎるでしょうか。

もう1つは、今回のフォーラムでは経済の話は出ていませんが、マレーシアが急速な勢いで第三次産業化しているということは就業ベースで見ればご存知の通りで、農業が減り、製造業も減って、第三次産業の従事者が圧倒的に多くなってきています。そのあたりのことも選挙分析のときに考える必要があるのかなということを考えていました。それは次のセッションのことなのかもしれませんが。